

かごしまの心

きょう せんじん
～今日，どの先人？～

小学校
5・6年



鹿児島県教育委員会

鹿児島県

目次

「主題名」

「教材名」

【登場する人物】

1 「ほこりある生き方」

「彫刻で「魂」を表す

それが使命」

【中村 晋也】

2 「困難に立ち向かう強い心」

「世界をつなぐ国際線」

…………… 5

【芝田 浩二】

3 「個性を生かして自分らしく生きる」

「「自分らしさ」が生み出す力」…………… 9

【柳田 理科雄】

4 「本当に大切なものとは」

「こわれたギヤマンと本当の宝物」…………… 12

【島津 斉彬】

5 「学び続ける意味」——【日本電気通信の父】

……………16

【寺島 宗則】
てらしま むねのり

6 「わたしにできることを」

——【子供たちのために】

……………20

【古市 静子】
ふるいち しずこ

7 「続けることの大切さ」

——【カリフォルニアのきせき】……………

24

【長沢 鼎】
ながさわ かなえ

児童の みなさんへ

この本は、鹿児島と関わりのある人たちのお話がついています。どのお話もその人が、鹿児島で過すごしながら思ったことや考えたことが書かれています。このお話から考えたことなどを自分の生活に生かしてみましよう。

※ 授業以外でも読んでみたい人の話があったら読んでみましょう。

※ この本以外にも鹿児島と関わりのある人たちのお話をのせた本に「郷土の先人」・「続・郷土の先人」「不屈の心」・「ふるさととの心」があります。学校に置いてあったり、鹿児島県教育委員会のホームページにのっていたりするので、読んでみましょう。

ほこりある生き方

彫刻で「魂」を表す それが使命



中村晋也なむらしんやさんは日本を代表する彫刻家ちやうこくかです。鹿児島中央駅前にある「若き薩摩の群像」さつまぐんぞうや伊集院駅いじゅういんえき前まえにある「島津義弘公像」しまづよしひろこうぞうなどを制作せいさくしました。二〇〇三年には、奈良県の薬師寺やくしじに、お釈迦様しゃかさまの弟子十人の像ぞうである「釈迦十大弟子像」しゃかじゅうだいてしぞうを納めおさました。その後、中村さんは、「お釈迦様の生涯しやうがいを作りたいたい。」と大きな作品への制作の意欲いよくを語りました。お釈迦様の生涯を彫刻として表すことは、長い年月がかかると分かっていた周りの人は、とてもおどろきました。なぜなら、そのとき中村さんは八十一歳さいだったからです。それから、十一年という長い年月をかけて制作し、九十四歳のときに「釈迦八相像」しゃかはつそうぞうを薬師寺に納めました。

このお話は、常に自分の目標を決めて、そのために全力をつくす中村さんのお話です。

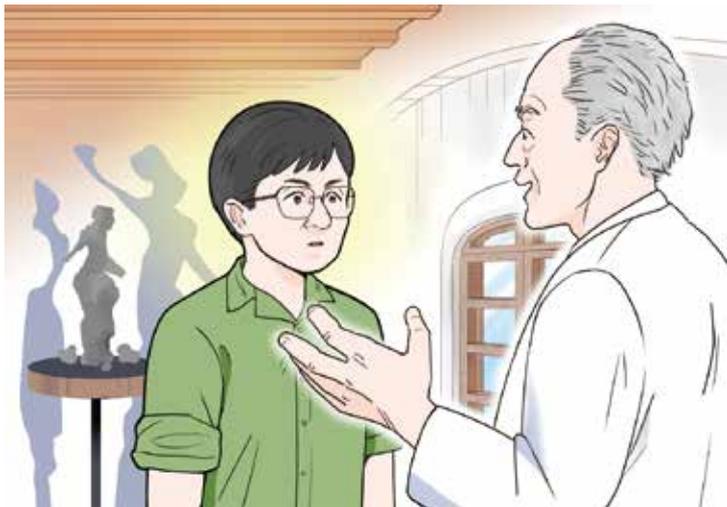
私は、三十九歳のとき、パリに留学をしました。そこで、スペイン出身の彫刻家アペル・フェノサの助手を務めながら、一日一つ作品を制作する生活を始めました。最初は順調に作品を制作していましたが、だんだん制作するものがなくなってしまうようになりました。これまで、作品ができないということは一度もありませんでした。しかし、ついに何を制作していいかアイデアがなくなってしまったのです。なやんでいる私にフェノサは、

「おめでとう。今までやってきたことを全てはき出せたということだ。これからは新しいものがどんどん入ってくるよ。彫刻は、詩でなければならぬんだ。」

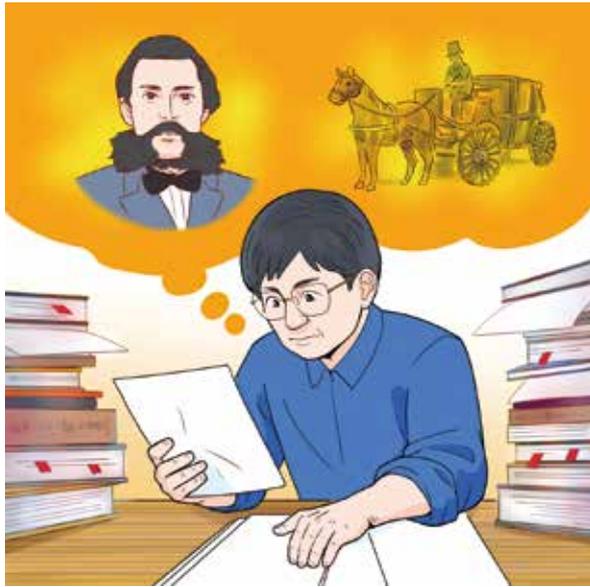
と声をかけてくれました。「詩」は、ただの言葉ではなく、読む人に想像力をふくらませながら読んでもらうことで、作者の思いを伝えることができます。つまりフェノサは、彫刻も作品をただ制作するのではなく、詩のように思いをこめて作品を制作することの大切さを教えてくれたのです。この言葉で私の心は晴れ、目の前が明るくなり、作品を制作することを再開することができました。さらに、新たな自分の作品のイメージがわいてくるようになりました。



【新しいアイデアから生まれた作品「森の奏者」】



日本に帰ってから、私はたくさんの方の人物像を制作しました。その時は、作品のモデルとなるモチーフをよく観察し、生きた時代や地域、周りの人々などをくわしく調べ、ただ単に似せて制作するのではなく、性格やどのようなことをしたのかも分かるように表現することを意識しました。そのために、作品の制作に入る前は、必ず作品に関係する場所へ実際に行き、自分自身で見たり、話を聞いたりして、はだで空気を感じるようにしています。



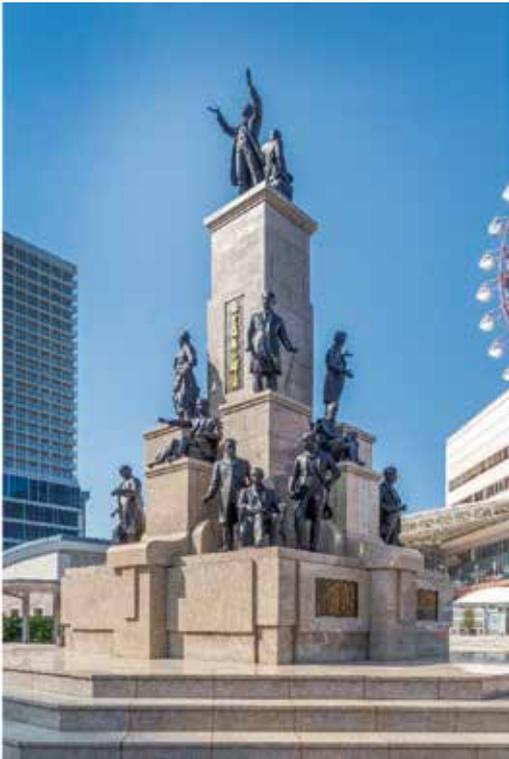
【大久保利通公像と
はいめん ぎよしゃ ぞう
背面の御者と馬の像】

甲突川沿いにある「大久保利通公像」を制作したときのことです。私はまず、大久保利通のお墓参りをしました。すると、そのとなりに小さなお墓を見つけました。「これはだれのお墓だろう。」疑問に思い調べてみると、それは、大久保と一しよに命を落とした御者と馬のお墓でした。そこで私は、考えました。「大久保の堂々とした姿だけでなく、共に生きた御者や馬を思う大久保の優しい心も表現したい。」依頼をされた大きな大久保利通公像の後ろに、小さな人物と馬の像をそつと加えました。大久保の「魂」まで表現した作品にしようとしたのです。

- ※ モチーフ：人や動物、自然など、作品制作の対象となるもの
- ※ 御者：馬車に乗って馬を操り、走らせる人

このように、私は人物を制作するときには、その人の生き方まで知る努力をし、表現していくことを大切にしています。パリへ留学して以来、五感を働かせながら、いろいろな見方ができるようになりまし
た。作品の制作を始めるまでに、しっかりとそのモチーフを観察し、さらに背景を知る努力をすること
で、表現したい作品の形が見えてきます。そして、手を動かすと自然と形になっていくのです。目には
見えない「魂」を形にすることが、彫刻家である私の「使命」なのです。

彫刻家中村晋也さんは九十九歳を迎えた今も、「魂」を表す使命を果たすために、制作活動を毎日続
けています。



【鹿児島中央駅前の「若き薩摩の群像」】



【伊集院駅前の「島津義弘公像」】

困難^{こんなん}に立ち向かう強い心

世界をつなぐ国際線^{こくさいせん}

「新しい世界に飛びこみ、自分の世界を広げなさい。」

鹿児島県加計呂麻島出身の芝田浩二^{しばたこうじ}さんの言葉です。

芝田さんは、二〇二二年、世界で新型^{しんがた}コロナウイルス

感染症^{かんせんしょう}が拡大^{かくだい}している中、ANAホールデイ

ングス株式会社^{かぶしき}（航空^{こうくう}会社グループ）の代表

取締役^{とりしまりやく}（社長）に就任^{しゅうにん}しました。会社のリー

ダーとして、この困難^{こんなん}を乗り越えた芝田さん

とは、どのような人なのでしょう。

芝田さんは、奄美^{あまみ}大島の加計呂麻島で小学生時代を過^すぎました。加

計呂麻島は、目の前に薩川^{さつかわわん}湾が広がり、自然^{ゆた}豊かな島です。

加計呂麻島では、台風が来ると、いつもとは変わった風景が広がります。

いくつかの大型船^{おおがたせん}が台風をさけるために、薩川湾に集まるのです。





ある日、お母さんが、薩川湾にうかぶ外国籍の大型船を見つめながら
言いました。

「あの船に乗ると外国に行けるのよ。学校の校歌にも、『七つの海に
船出せん。』とあるでしょう。きっと、あなたもあの船と同じよう
に世界とつながっていけるのよ。」

お母さんの言葉が、心のおくにひびきわたりました。

「僕もあの船の船長になって、いろいろな世界に行ってみたい。」

芝田さんは、外国へのあこがれをもち始めたのです。

大学卒業後、ANAホールディングス株式会社就職しました。当時、社内では、海外に目を向けて、
国際線に力を入れていました。国際線の発展により、様々な国に多くの人々が行き来することができるようになりました。芝田さんは、国際線の発展に関わる仕事を行う中で、世界中の人々が、直接、顔を
合わせて話し合うことの大切さやおたがいの思いを肌で感じる機会がこれからも大切だと感じていま
した。そして、国際線は、世界をつなぐために欠かせない存在になることを確信していたのです。しかし、
大きな問題が生まれていました。国際線は、就航以来、赤字が二十年間ほど続いていたのです。

「国際線は、路線は増えているが、お客さんはなかなか増えていないじゃないか。」



「もう、国際線をやめて、国内線に特化すべきだ。」

社内からは国際線に対し、多くの厳しい声が挙がりました。しかし、芝田さんの思いは変わりません。

「国際線は、世界の国々をつなぐために絶対に必要になる。国際線は会社が成長する中で鍵になるはずだ。」

芝田さんは国際線の発展に向け、仲間同士で

「きつと黒字化を果たせる。」

と、おたがいにはげまし合ったのです。そして、芝田さんは、どんなに国際線に対する厳しい声が挙がっても、気持ちはずらくことなく、自分ができることを続けたのです。

どんなに大きなかべが目の前に立ちほだかつても努力する芝田さんの姿勢が、周囲の人々の心を動かしたのでしょう。ついに、国際線は収益を上げて逆境を乗り越えることができたのです。

その後、国際線のさらなる拡大にも成功し、順調に会社が成長していきました。ところが、新型コロナウイルス感染症が世界中に広がり、航空機の利用者が減少したことで、会社にも大きなえいきようをあたえました。このようなときに、社長を任せられたのは、これまでの困難を乗り越える姿が認められたからなのでしょう。しかし、社長を任せられたものの、心の中で大きな迷いがありました。今までに



拡大も落ち着き、少しずつ航空機を利用するお客さんも増えてきました。

国際線の発展と新型コロナウイルス感染症への対応という、二度の困難を乗り越えることができたのは、世界中の人々が国際線を利用し、自分の世界を広げていく未来が、芝田さんの目には見えていたからなのかもしれません。

「新しい世界に飛びこみ、自分の世界を広げなさい。」

今も航空機は、わたしたちの夢や希望を乗せて、世界の空を飛び続けているのです。

経験したことの無い不測の事態の中で、社長という責任を背負う覚悟はあるだろうか、自分には社長としての力が本当にあるのだろうか。何度も何度も、くり返し自分と向き合いました。そして、芝田さんは決心したのです。「世界中の人々が、新しい世界に飛びこむことができるような世の中になりたい。」「社員一人ひとりがほこりと夢をもって働き続ける会社になりたい。」苦しい時間が続きながらも、必死に社員と協力して働いたのです。ようやく、新型コロナウイルス感染症の



3

個性を生かして自分らしく生きる

「自分らしさ」が生み出す力

みなさんはマンガやアニメは好きですか。きっと好きな人も多いと思います。でも、「ドラえもん」のタケコプターで本当に空を飛べるのかな。「ルフィのうでは、なぜあんなにのびるのだろう。」などということを真けん^{まけん}に考えたことはありますか。そのようなことを真けん^{まけん}に科学の力で解き明かすのが、作家の柳田理科雄^{やなぎたりにかお}さんです。

柳田さんは『空想科学読本』^{くうそうかがくどくほん}という本を書きました。この本では、マンガやアニメの世界を科学の力で分せき^{わけ}しています。たとえば「ウルトラマンが本当に四十メートルの大きさだったら、地球に上陸するだけでも大変な事になるのではないか。」「ドラえもん^{ひみつ道具}のひみつ道具を科学的に考えたらどうなるか。」ということが、个性的なアイデアで楽しく記述^{きじゆつ}されています。そのため、本が発売されるとたちまち大人気となりました。

では、どうして柳田さんはこのような本を書くことができたのでしょうか。

柳田さんは小学生のころ、特に「マジンガーZ」^{ゼット}や「科学忍者隊ガッチャマン」などの、科学の力で平和を守るアニメの中に登場する科学者たちに、強いあこがれをいっていました。



【空想科学読本シリーズの表紙】

小学六年生のときには、骨組みの長さがおよそ四メートルある大きなたこを作りました。柳田さんは、「どうすれば飛ばすことができるのか。」を真げんに考え、「風力」や「たこの形」、「たこの大きさ」といった要素を、子供ながらに科学の力で解き明かそうとしました。しかし、完成したたこは大きすぎて、空に飛ばすどころか、庭から外へ出すことさえできませんでした。

中学校や高校でも理科が好きだった柳田さんは、科学を学ぶことができる大学へ進学しました。ところが大学では、科学以外にも多くの授業があり、思うように科学に専念できず、と中で退学することになりました。

大学をやめたあとは、学習じゅくの先生になり、しばらくあとに経営も始めました。子供たちに学ぶ楽しさを伝えることは、とてもやりがいのあることでしたが、その思いだけでは子供が集まらず、経営はうまくいきませんでした。

なやんでいたある日、出版社に勤める友人から「マンガやアニメにかかれていることを科学的に分せきした本を書いてみないか。」とさそわれました。その友人とは、中学生のころによくそのような話をしていたのです。柳田さんは「これでまた好きな科学に取り組める。」と思い、しつ筆を始めました。



【科学の楽しさや面白さを伝える柳田さん】

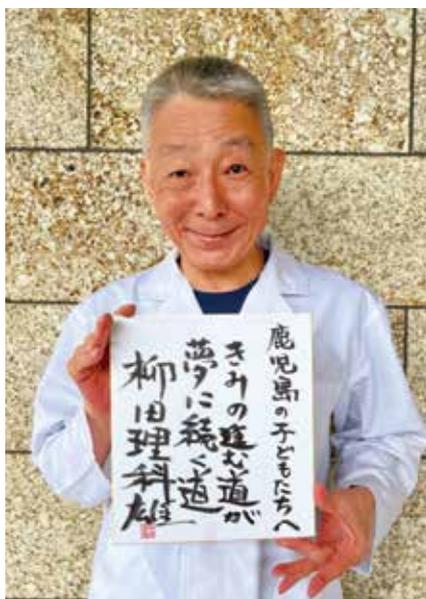
好きな科学を多くの人に伝えられる『空想科学読本』のしつ筆は、とても楽しい仕事でした。難しい計算や調査も、苦勞とは思いませんでした。しかし、大人から子供までの読者に、科学で分かりやすく説明することは、思っていたより、ずっと大変な作業でした。

しかも、じゅくの先生を長くやっていたので、柳田さんは新しいマンガやアニメにくわしくありませんでした。そこで、高校生たちから「気になるマンガの科学的な質問」をば集し、それに答えるという取り組みを始めました。ただ、質問に答えるためには、多くの作品を読んだり、見たりしなければなりません。そのため、柳田さんは毎年数百冊のマンガを読み、科学の力でその世界を分せきしました。それは、とても楽しい作業だったそうです。その結果、『空想科学読本』は、様々なシリーズが出され、子供から大人までは幅広く読まれています。

インタビューで柳田さんはこう語っています。

「自分らしく生きようと意識しすぎると、かえって苦しくなってしまう。大事なものは、自分が進もうとしている道が夢に続く道だと信じて、地道に努力することです。そうしているときが、一番自分らしいのではないのでしょうか。」

そして今も柳田さんは、科学の楽しさや面白さを伝える活動を続けています。



4

本当に大切なものとは

こわれたギヤマンと本当の宝物たからもの

みなさんは、大切なものをうっかりこわしてしまったり、友達が失敗して落ちこんでいるのを見たりしたことはありませんか。その時、どんな気持ちになりましたか。

これは、今から二百年ほど昔、江戸時代の薩摩のお話です。のちに薩摩藩の殿様となり、日本の近代化を進めた島津斉彬がまだ邦丸と呼ばれていた十才のころの、薩摩藩の江戸屋しきでの出来事です。

邦丸のそう祖父である島津重豪は、新しいものやめずらしいものが大好きで、遠い外国であるオランダから取り寄せた「ギヤマン」の器をととても大切にしていました。ギヤマンとはガラスのことです。当時の日本では大変貴重で、二つ一組のギヤマンは、まるで宝石のようにキラキラとかがやき、見る人の心をうばう美しさでした。

ある日のこと。屋しきの中で、重豪の一番近くで仕える家来の一人が、その大切なギヤマンの器を運んでいました。そのうちの一つを、あやまってゆかに落とす、粉々に割ってしまったのです。「パリン！」という音がひびきわたり、周囲の空気は一しゅんでこおりつきました。

かけつけた重豪は、ゆかに散らばるガラスのかけらと、顔を真っ青にしてふるえている家来の姿を見て、すべてを察しました。

「なんとということだ！私の宝を……」

重豪にとって、このギヤマンはただの器ではありません。遠い外国へのあこがれや、新しい時代を切りひらく夢のしようちようでもあったのです。その大切な思いがふみにじられたように感じ、重豪の心はいかりでいっぱいになりました。

「そなたの不注意で、二度と手に入らぬ宝が失われた。その責任は重いぞ！『閉門』を命じる！」

閉門とは、その人の屋しきの門を固く閉ざし、家族全員が一步も外へ出ることを許されないという、当時の武士にとっては大変きびしいばつでした。仕事もできず、まるでろうやに入れられたような日々が続くのです。家来は、自分の犯した失敗の大きさと、家族にまでおよぶばつの重さに、ただただなみだを流すしかありませんでした。

この話を聞いた邦丸は、胸がしめつけられるようにいたみました。

（たしかに、大おじい様の宝物をこわしたのはいけないことだ。でも、たった一度の失敗で、あの家来やその家族がずっと苦しまなければならぬなんて……）



邦丸は、いかりに燃えるそう祖父の心と、きょうふと絶望にうちひしがれる家来の心、その両方を想像しました。立場がちがえば、同じ出来事でも、心の受け取り方は全くちがってきます。どうすれば、二つの心が少しでも通じ合えるのだろうか。邦丸は必死に考えました。

そして、邦丸は一つの決意を胸に、重豪の部屋へと向かいました。

「大おじい様。お願いがございます。どうか、残っているもう一つのギヤマンの器を、私にくださいませんか。」

思いがけない申し出に、重豪はおどろきました。

「ほう…。しかし邦丸よ、これは二つ一組で意味のあるもの。片方がこわれてしまつては、もう何の役にも立たぬが、どうするつもりじゃ。」

「片方だけでかまいません。どうか、これをおゆずりください。」

邦丸は、まっすぐな目で重豪を見つめてうったえました。そのひとみの奥に、何か強い決意のようなものが光っているのを、重豪は見のがしませんでした。重豪は、しばらくだまって邦丸の顔を見ていましたが、やがて、ふっと笑みをうかべて言いました。



「分かった。そこまで言うなら、お前にやろう。」

邦丸は、器を大切そうに受け取ると、ていねいにお礼を言いました。そして、さらに言葉が続けます。

「おおじい様。もう一つ、お願いがございます。あの家来が大切な器をこわしたことは、確かにいけな
いことです。しかし、どれほど美しくめずらしい器でも、人が使うための道具にすぎません。道具は
人のためにあるものだと、私は思います。どうか、どうかあの家来をお許しください。」

その言葉を聞いた重豪は、ハツとしました。そして、しばらく考えこんだ後、大きくうなずきました。

「うむ……。お前はわしが気づかぬことを教えてくれた。物の価値にとらわれ、人を思いやる心を忘れ
ていたわい。よし、お前の言うとおりにしよう。」

この知らせを聞いた家来とその家族は、なみだを流して喜びました。そして、自分を救ってくれた幼

い邦丸への感謝の気持ちを、決して忘れませんでした。

邦丸の行いは、失敗した一人の家来だけでなく、この話を聞いたすべての人の心を温かく照らしたのです。



5

学び続ける意味

日本電気通信の父

今は、パソコンやスマートフォン、タブレットを使って、情報を調べたり友達と交流したりすることが、いつでもどこでもできる時代です。そのような現在の通信ネットワークの基となる電気通信の土台をつくった人こそ、寺島宗則てらしまむねのりです。医者や科学者、外交官、政治家と、様々な分野で活やくした寺島ですが、なぜ電気通信に特に力を注いだのでしうか。

寺島は、阿久根市脇本あくねしわきもとで生まれ、松木家の養子となりました。薩摩藩さつまはんに仕える医者であった父とともに、わずか五歳ごさいで長崎に行くことになりました。長崎といえば、江戸時代、鎖国さこくしていた日本で外国との交流を認められた、ただひとつの町です。寺島は、外国の文化にふれながら、オランダ語などを学



※ 鎖国：外国との貿易などを厳しく制限し、貿易で得られる利益や海外からの情報を幕府が独占できるようにしたこと。

ぶことができずました。また、江戸に留学すると、多くの師から、医学や蘭学（西洋のことを学ぶ学問）、漢学（中国のことを学ぶ学問）を学びました。特に蘭学では、化学や物理、天文、歴史、地理などの研究にはげみました。こうして外国のことを学び続けた寺島は、日本国内だけではなく、外国への広い視野をもつことが、これからの日本のためになると考えるようになりまし

た。
オランダ語をほん訳できる寺島は、薩摩藩主の島津斉彬にとつて、大切な存在でした。寺島は、外国に関する本を何冊も読み聞かせ、その内容を斉彬に伝えました。このころは、人や馬が走って情報を届けるしかなかった時代です。斉彬は、電気通信による情報のやり取りの便利さに注目し、蘭学にくわしい寺島に電信機の研究を命じました。寺島は、くり返し実験に取り組み、約五百四十メートルを電気通信でつなぐことに成功しました。

その後、寺島は、ヨーロッパを訪問しました。幕府の医師・



尚古集成館蔵

【初期の電信実験に使用された電線】



通訳つうやくとして訪れるおとすと、学校や病院、銀行、会社、工場、そして通信局を見学し、近代的な文化ちよくせつを直接学ぶことができました。このときの経験けいけんから、今度は薩摩藩英国留学生さつまはんえいこくりゆうがくせいの引率いんそつを任まかされることになりました。

初めての汽車に乗って、長きよりを移動いどうする中で、おどろく出来事がありました。駅に着いたばかりにも関わらず、留学生たちのとう着が分かっていたかのようにかんげいを受けたのです。

「どうして自分たちがこの汽車で着くことが分かっていたんだ。」

と、わけが分からない様子の留学生たちに対して、

「電気通信で連らくが来ました。線路のそばに立っている電線で知らせるのです。」

と、説明がありました。電気通信は、情報じょうほうを一しゅんで伝えるツール

として、ヨーロッパの多くの国々で整備せいびされていました。「日本を豊ゆたかにし、これからの世界とかたを並ならべるには、電気通信が重要になってくるだろう。」と、寺島は感じたのでした。



※ 薩摩藩英国留学生…海外の文化や技術ぎじゆつを直接学ぶため、薩摩藩が独自で十五人の留学生をイギリスに派はけんした。

外国との貿易が盛んになると、政治の中心である東京、寺島が働いていた横浜、そして外国との間で、すばやく情報をやり取りする必要性も出てきました。そこで、東京・横浜間約三十二キロメートルをつなぐ電気通信事業を開始しました。そのとき、寺島は、電気通信の仕組みを日本で開発することにこだわりました。なぜなら、国内の電気通信を外国に任せてしまえば、日本の情報が外国に知られてしまうおそれがあるからです。そのため、外国とつなぐ海底ケーブルは長崎だけにするように、外国の会社との交し方を重ねました。ここから、日本の電気通信もうは、おどろくほどのスピードで整備されていきました。このことから、寺島は「日本電気通信の父」と呼ばれています。

寺島はとにかくまじめで、物事に真正面から取り組む人だったといえます。寺島が多種多様な学問を学び続けてきたことは、これからの世界の流れを見通し、情報の大切さを見いだすための力になりました。あなたも、学びを通して未来を創る一人です。これからの時代を生きるあなたにとって、学び続けることはどのような意味をもつのでしょうか。



【寺島宗則像】

6

わたしにできることを

子ども 子供たちのために

種子島^{たねがしま}、西之表市^{にしのおもてし}のわかさ公園には、一つの石ひがあります。その石ひには「先生英邁^{えいまい}、敢為^{かんい}男子を凌ぐ^{しの}」と書かれています。これは、「先生は、才能^{さいのう}が抜きんでており、困難^{こんなん}に負けず、物事をやりとげることは男女関係なくだれにも負けない」という意味です。この先生、古市静子^{ふるいちしずこ}はどんな人だったのでしょうか。



【わかさ公園にある石ひ】

静子は、江戸時代^{えど}の終わりごろ、種子島で生まれました。小さいころから、新しいことを知ることが大好きな子でしたが、その時代は、女の子は勉強よりも、ぬい物や生け花などのけいこの方が大切だと考えられていました。だから、男の子のように自由に学ぶことが難^{むずか}しかったのです。それでも、家の人がね静まった後、弟の本を借りて、こっそりと勉強を続けました。

二十歳^{はたち}になった静子は、「もっと自由に学びたい。」と、両親にはないしよで、大阪行きの船に乗りこみました。しかし、船は出港してすぐにあらしにあい、危^{あや}うく命を落としかけました。家に帰ると、

両親から、大変おこられました。静子は「もっと自由
に好きな勉強をしたいだけなのに。」とくやしきで
胸がいっぱいでした。

その後も一人で勉強を続けましたが、目の病気に
かかってしまいました。治りようのために種子島を出
た時、鹿児島で静子の人生を変える大きな出会いがあり
ます。それは、アメリカから帰ったばかりの森有礼で
す。

後に文部大臣（現在の文部科学大臣）になる人です。有礼から、アメリカの進んだ女子教育の話を聞き、女性も自由に学べることにおどろき、うらやましく思いました。もっと学びたいと、鹿児島に残り、有礼のもとで勉強を続けました。やがて、有礼は東京に行くことになり、静子は、自分も東京に行き、大学で学びたいと思いました。有礼に相談すると、支えんをしてもらえらることになり、東京の大学で学ぶことができました。

大学では、日本最初の保育士、豊田英雄から、幼いうちから男女関係なく教育を受けることの大切さを学びます。静子は、以前、話を聞いたアメリカの教育のように、「自分も、子供たちが自由に学べるかん境を作りたい。」と強く思うようになりました。ところが、入学して三年後、無理をしすぎて、



病気になり、学校を続けられなくなってしまいました。さらに、同じ時期に、お父さんが亡くなり、種子島に帰ることになりました。それでも、静子の心が変わることはありませんでした。

しばらくすると、鹿児島に幼稚園を作った英雄の助手になります。子供たちのためにけん命に働く英雄の姿を見て、保育の仕方について学びました。その後、英雄の支えんを受けて、東京の幼稚園で働くことになりましたが、また病気が再発し、仕事を続けられなくなってしまいました。りよう養の日々の中で静子は思いました。

「有礼さんは、文部大臣として日本の教育のために働いている。英雄さんは、日本各地で幼稚園を作っている。自分は、このままでいいのだろうか。私にも、子供たちのためにできることがあるはずだ。」

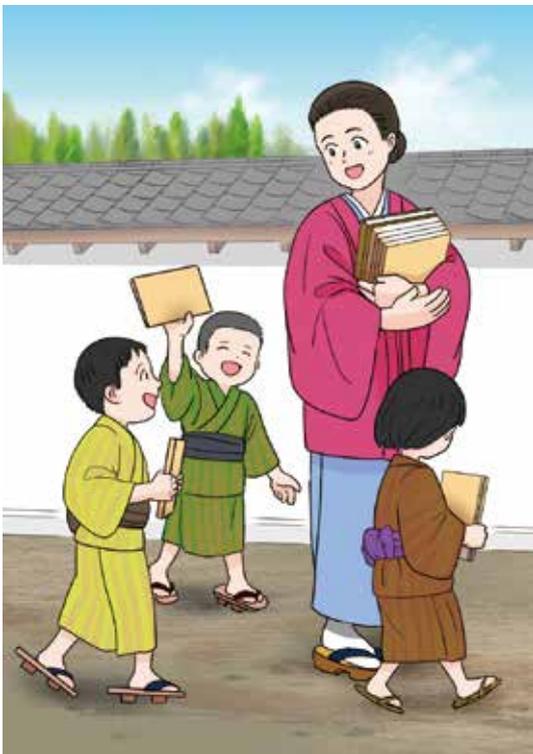
病気がよくなると、たくさんの人に協力をお願いし、自分もお金を出して東京の駒込に幼稚園をつくり

ました。そのころ、全国に幼稚園はわずか三十八しかありませんでした。何もかも初めてのことがばかりで、運営していくお金にも大変苦労しました。何よりも「そんな幼い子にお金をかけて教育するなんて、とんでもない。」と考える人が多くいました。それでも、静子は、自由に勉強できなかった自分のよう



な思しいをしてほしくないと、目の前の子供こどもたちのために働きました。子供たちが楽しそうに遊び、学ぶ姿すがたを見るたび、「子供たちのため、いつか社会に受け入れられるまでがん張ばろう。」と必死に働いたのでした。始めは、幼稚園に通う子供が少なく、運営に苦労しましたが、もうけを考えず、子供たちのためにつくしました。いつも愛情じょうじょうたっぷり子供たちの成長を見守り続けることで、少しずつ幼稚園に通う子供が増ふえてきました。社会の考え方も次第に変わっていったのです。

静子の作ったこの幼稚園は、今でも子供たちを育て続けています。そして、今では、全国に八千をこえる幼稚園があり、多くの子供たちが自由に学んでいます。



7

続けることの大切さ

カリフォルニアのきせき

一九八三年にアメリカのロナルド・レーガン大統領が来日した際、国会の演説の中で三人の日本人の名前を挙げて演説しました。その中の一人に「長沢鼎」という人物がいました。かれのことを「カリフォルニアのぶどう王」とたたえ、「サムライから実業家になり、日米両国に多くをもたらした人物」としてほめたたえました。この発言により、鼎は「日米交流の祖」として広く知られるようになりました。

鼎は、今から約百七十年前に鹿児島の下で生まれました。十三歳のとき、薩摩藩の命令で十五人の留学生が現在のいちき串木野市羽島を出発し、イギリスに留学することになりました。かれらが、海をこえて外国へ行くことになったのは、日本が世界とつながろうとしていた時代だったからです。その留学生の中で、鼎はだれよりも早くまげを落とし、



【薩摩藩英国留学生記念館から見える羽島の海】



【長沢 鼎】

留学にのぞみました。最年少ながら、そのちよう戦に対する意欲は人一倍強かったのです。留学の地で、
「薩摩藩の役に立てるように、西洋の技術ぎじゆつを学ばなければ。」との思いからもう勉強した結果、言葉も
分からなかった場所で、英語だけでなく数学や地理など、多くの分野で認められ、イギリスの新聞に
成績優秀者せいせきゆうしゆうとしてけいさいされるまでになりました。

しかし、その後、幕末ばくまつの混乱期こんらんで日本からの送金がとだえ、生活に困こまるようになります。日本の情勢
を心配して帰国した者や任務にんむを果たして帰国した者など、多くの仲間が日本に帰る中、鼎かなえは残った六人
の仲間と共にアメリカにわたりました。ここで、生がいをかける
ことになるワインとの運命的な出会いを果たしました。

農園で働きながら勉強を続け、不平をもらすことなく農業の
知識ちしきや技術ぎじゆつを身に付けていきました。アメリカにわたった一年後、
一しよにわたった他の留学生は日本に帰っていきました。鼎は、
「これからどうすべきか。」多くのかつとうがある中、「薩摩藩の
ためにまだ何も成しとげていない。」「日本の役に立ちたい。」と
考え、アメリカに一人残るかなやみました。日本に先に帰ってい
た留学生りゆうがく、森有礼もりありのりが初代駐米大使ちゆうべいたいしとしてアメリカを訪れたとき、



日本では江戸幕府が終わり明治政府が誕生したことを知らされました。そのとき森から、

「来年ぼくが帰国するとき、君も一しよに帰るか。」

と聞かれました。しかし、鼎は、まだ何も成しとげていない自分は、帰りたくても帰るわけにはいかな
いと考え、「このアメリカで、将来に役立つことを学ぶために、残ろうと思う。」と帰らないことを決意
しました。

その後、さらにワイン作りに一生けん命になります。ぶどうを育て、お酒を作る仕事は、気候や土
のくわしい知識が必要です。知識や技術を身に付けるために、鼎は努力を続けました。何一つなかつ
た土地から、失敗をくり返しながらも、あきらめずにちよう戦をし続け、ついに、カリフォルニア州
で広大な農園をつくり「ファウンテングローブ・ワイナリー」というワ
イン工場を完成させました。その後もじよう造所が火事になって消失し
たり、約五万本のブドウの木が病害にあつたりと大変なことがありなが
らも鼎はあきらめませんでした。害虫のひ害をなくすために、接ぎ木の
技術を取り入れるなど、強いブドウの生産に成功しました。鼎は、たゆ
まぬ努力と知えで、カリフォルニアワインを完成させたのです。鼎の作
ったワインは、イギリスや日本にまで輸出されるほど人気を集め、人々



【広大な農園の様子】

から敬意をこめて「ワイン王」や「バロン・ナガサワ」と呼ばれるようになりました。カリフォルニア
ワインが、ヨーロッパに輸出され、はん売されたのは鼎たちが作ったワインが初めてだったのです。

鼎の成功の裏にはたくさんの苦労がありました。それでも誠実に、そして真面目に仕事を続けました。

鼎はアメリカへの移民日本人第一号として、アメリカの生活を取り入れながらも日本人としての精神を
忘れることなく、アメリカでの暮らしに適応して、大きな業績を残したのです。ちよう戦することを
それず、自分の信じた道を進み、カリフォルニアワインを通じて、日本とアメリカのかけ橋となりまし
た。カリフォルニアの土地から世界にほこれるワイン作りに成功した鼎は「カリフォルニアのきせき」
の静かな立役者でもあったのです。



保護者の皆様へ

この本は、鹿児島県の子供たちのために作成した道徳の教材です。子供たちが、この本に登場する人物の考え方や生き方にふれ、自分の生き方について考えを深め、夢や希望をもって過ごしてもらえることを願って作成しました。ぜひ、この教材と一緒に読んでいただき、お子さんと思ったことや考えたことを話し合ってみてください。また、さらに知りたい、深めたい場合には下に記載している【参考・引用文献】も紹介してみてください。

【参考・引用文献】（順不同）

□島津 斉彬

池田 俊彦（1954）「島津斉彬公伝」岩崎育英奨学会

※ 逸話の元史料は明確ではなく、後世の伝承として紹介されているもので、この逸話をもとに作成しました。

□寺島 宗則

鹿児島県歴史資料センター黎明館（1992）「企画特別展 五代友厚・寺島宗則・森有礼ー近代日本につくした鹿児島人ー」図録
阿久根市役所商工観光課（2024）「日本の電気通信の父 寺島宗則松木弘安物語 大いに広い世界を学べ 日本の若者よ！」

□古市 静子

柳田 桃太郎（1975）「種子島の人」柳田 桃太郎

西之表市教育委員会「種子島の人・その心（第十二話）ー古市静物語」西之表市教育委員会

前村 晃（2012）「豊田英雄と草創期の幼稚園教育に関する研究；補遺1ー保育者・古市静子の立ち位置ー」

https://saga-u.repo.nii.ac.jp/record/20507/files/maemura_201201.pdf（2025年12月1日閲覧）

□長沢 鼎

森 孝晴（2018）「長沢鼎～武士道精神と研究者精神で生き抜いたワインメーカー～」高城書房

森 孝晴（2022）「長沢鼎とその周辺」高城書房

長沢鼎マンガ製作活用検討委員会編（2024）「バロンナガサワー羽島から世界へー」鹿児島県いちき串木野市

【掲載画像】

□柳田 理科雄

「空想科学読本シリーズの表紙」（9ページ）「ジュニア空想科学読本」角川つばさ文庫／KADOKAWA、「ポケモン空想科学読本①」オーバーラップ

□寺島 宗則

「初期の電信実験に使用された電線」（17ページ）尚古集成館蔵

「寺島宗則像」（19ページ）出典：ColBase（https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/A-738?locale=ja）

※上記出典画像を加工して掲載

□長沢 鼎 「長沢 鼎」（24ページ）、「広大な農園の様子」（26ページ）薩摩藩英国留学生記念館所蔵

【協力】（敬称略，順不同）

中村晋也美術館／ANAホールディングス（株）／ANAあきんど（株）鹿児島支店／空想科学研究所／寺島宗則記念館／種子島開発総合センター「鉄砲館」／薩摩藩英国留学生記念館

楠元 香代子／野間口 泉／森 孝晴

假屋園 昭彦／島津 公保／下豊留 佳奈／野間 友見／永里 智広／山下 久美子／泉 宗弘／

松岡 高史／榊 隼弥／前畑 あさよ／塩満 貞徳／岩重 智美／宮内 弘毅／坂口 洋幸／安樂 朋陽／

諸平 幸奈／中蘭 理一郎／中村 元気／西原 真琴／元山 仁／長島 政彰／前野 理恵

学習内容一覧			
	主題名	教材名	内容項目
1	ほこりある生き方	彫刻で「魂」を表す それが使命	D よりよく生きる喜び
2	困難に立ち向かう強い心	世界をつなぐ国際線	A 希望と勇気、努力と強い意志
3	個性を生かして自分らしく生きる	「自分らしさ」が生み出す力	A 個性の伸長
4	本当に大切なものとは	こわれたギヤマンと本当の宝物	B 相互理解、寛容
5	学び続ける意味	日本電気通信の父	A 真理の探究
6	わたしにできることを	子供たちのために	C 勤労、公共の精神
7	続けることの大切さ	カリフォルニアのきせき	A 希望と勇気、努力と強い意志

「道徳教材～小学校5・6年生用～」
令和8年2月発行
編集・発行 鹿児島県教育委員会
〒890-8577 鹿児島市鴨池新町10番1号

この本の副タイトルについて

副タイトルを「今日、どの先人？（きょう、どのせんじん？）としました。

その理由は、以前、^{わたし}私たちが作成した「郷土の先人（きょうどのせんじん）の^{ぞくへん}続編（4作目）であるからです。

また、これまでの教材を^{ふく}含めて「今日は^{だれ}誰の話を読もうかな」と前向きに思っ^こてほしいという願いも込めています。